

# 青少年海外ホームステイ 派遣事業研修レポート

## 私たちの見た アメリカ

昨年、白根国際交流協会が主催したインターナショナルコンテスト。市内からは7人の中・高生が選ばれ、春休みの2週間アメリカへホームステイ体験をしてきました。異文化の体験を通して、大きな感動を持ち帰った7人の皆さんの帰国報告文の一部を紹介します。



### アメリカの 学校について

渡辺 樹里 (東萱場)

私の今回のホームステイのテーマは、「アメリカの学校・授業について調べる」というものでした。まず一日の授業ですが、授業時間は五十分、六限で終わりです。休み時間は五分と短く、その間に自分のロッカーに行ったり、教室に移動したりと休んでいる暇はありませんでした。しかし、一日の学校生活の中で自分の好きな勉強をしたり、宿題をしたりと自由に使う時間がありました。次に校則についてですが、周囲から見ると校則など無いように見えます。メイクやヘアスタイルは自由。もちろんピアス、アクセサリーも自由です。ほかにも、みんなが授業中にアメやガムを食べていることには驚きました。アメリカの生徒は先生と友達感覚で授業しているので、意見交換がとても活発。学校全体がとても自由な感じでした。ホームステイを通して自分のもの見方が変わったと思います。本当に良い経験をしました。しかし、相手の気持ちが分かっていても自分の気持ちを言葉に表現して伝えることができなかったと悔しかったです。

### アメリカで 過ごした日々

中島 映子 (庚)

私は二日間ブッチャー中学校に行き、残りの八日間はウィルコックス高校に行きました。十四日間ウィルコックスの人たちと接してきて、アメリカの人はとても親切でした。それに何かあると「サンキュー」という言葉を何度も使っていました。学校は日本とは違い、さわやかな雰囲気でした。授業はまるで遊んでいるようなものもあり、勉強の進み方が日本よりもゆっくりだと思いました。私が「日本の生徒は学校から帰っても勉強するんだよ」と教えたならみんな驚いていました。

アメリカの食べ物、ジュースはリトルサイズでも日本のサイズを一回り大きくしたようなものでした。ミンツのラムネは日本の歯磨き粉を三倍くらい濃くしたようなものでした。キャンディー、クッキー、チョココレートと何から何まですごく強烈な色が付いていました。それにしてもアメリカの人は口が止まらない。常に食べ続けているといった感じでした。小学生のころからずっと抱いていた夢「アメリカへ行っていたくさんの友達をつくること」が実現し、良い経験ができました。



### アメリカでの生活

中村 千尋 (道湯)

私のホストファミリーは、リチャードとジュリーの父子家庭。二人は、私が辞書を引く間待っていてくれたり、私がかからない単語は辞書で引いてくれたり、優しく接してくれました。ジュリーはスペイン語を専攻していて、小学校でスペイン語の絵本の読み方を子供たちに教えていました。これは授業の一環で、自分の勉強していることを、小学生に教えるということのようです。

さて、私の研修テーマは「アメリカのリサイクル事情」。一般的にリサイクルされているものは、ガラス・紙・アルミニウム缶。缶をリサイクルすると五セントももらえるそうです。日本のようにスーパーマーケットなどの発泡スチロールの回収は行われていないようでした。その中でも、缶をリサイクルするとお金がもらえるというのは、とても良い制度だと思います。日本でも、このようにすれば缶のリサイクルがもっと活発になるかもしれません。

二週間は本当に短く、ほんの少しアメリカをのぞいただけでしたが、言葉で言い表せないほどの貴重な体験でした。

### Thank you for everything

内山美佐江 (古川)

私がお世話になったホストファミリーは、アジア系の人たちでした。彼らは日本のことに興味を持っていて、日本についてたくさん質問をしてくれました。私を学校に連れて行ってくれたのがタムさん。私と同じ十五歳ですが、大人っぽくて、しっかりしていました。彼女は一度、日本でのホームステイを経験しているそうです。

学校は、四千人くらいの生徒がいて、ベルが鳴ると大移動。スクールバスもすごく込んでいました。そして、ほとんど毎日テストがありました。日本と違って小さい紙で、その上選択肢の問題でした。アメリカの生徒は「難しい」と言っていました。私にはそれほどでもありませんでした。また、日本語のクラスでは、私はたかさんの日本語を教えることができました。日本人でも難しいことを習っていたのは感心させられました。

アメリカでのホームステイは、気が付けば二週間がすぎたという感じでした。素晴らしい思い出を作らせてくれた皆さんに感謝しています。今度行くときは、今よりもずっと英語を上達させていきます。



### アメリカが くれたもの

森山 由紀子 (能登4)

私は今回、生まれてはじめて海外へ行きました。最初は、楽しみでしかたがありませんでした。サンフランシスコ空港から足を一歩出したとき「憧れのアメリカだ」と、ドキドキしていました。実際ホストファミリーと会ってみると、とても大きな「言葉の壁」があることを思い知らされました。彼らはとても優しく、ゆっくりと簡単な単語を使って話してくれました。辞書を引いたり、紙に書いたり、時にはボディーランゲージで表現してくれました。

授業は、英語ばかりで何を言っているのかよく分かりませんでした。日本語の授業と数学の授業だけは理解することができました。日本語の授業では、先生のような立場になり、あらためて日本語の難しさを知りました。数学の授業は、日本でも習い終わった所などを勉強していました。数学は図形も公式も世界共通で良かったです。

この二週間は忘れることのできない私の宝物となりました。バスポートが切れる前にもう一度アメリカへ行きたいです。そしてその時までには私の英語がもっと上達していればと思います。

### アメリカでの 貴重な体験

上村 文子 (大通南2)

私は平日はホストファミリーと一緒に高校の授業に出ています。そこで感じたことは、アメリカは自由の国であり、個人個人が強い責任感を持っているということです。

私の行った高校ではほとんどの先生が授業中の飲食を認めていました。しかし、先生の話を聞かずにうるさくしていると教室から出されてしまいます。生徒は食べたり飲んだりしながら、話をきちんと聞いています。日本では授業中に飲食する生徒はいませんが、全員がまじめに先生の話を聞いているとは限りません。

私の研修テーマはごみ問題。事前学習でアメリカのゴミの実態について何も調べていかなかったが、すべてが日本より上回っているアメリカ、何かしらやっているとだるうと思いがら調べ始めました。しかし、あまりにも使い捨ての品物が多いこと、そしてごみの量が多いことにショックを受けました。研修テーマについて話してみると、笑われてしまいました。アメリカでは、特にごみについて日本ほど問題になっていないようです。土地が広いからなのかと考えてしまいました。



### 夢のような...

佐藤 紘子 (大通南1)

私がお世話になった家は、仕事の都合でお父さんはワシントン州、お母さんはユタ州に住んでいて、十九歳のレイアと九歳のライアンの二人暮らし。時々、近くに住むおばあちゃんが来てくれていました。家には炊飯器があり、何回かごはんを炊いてくれました。しょう油やはしを用意してくれて、それなりにJAPANESEは知られているんだなと感じました。

普段は高校に行ったり、レイアの通う大学へ行って行ったりしていました。学校が終わるとレイアのボーイフレンドと一緒に友達の家へ行き過ぎました。甘いものの好きな私は、レイアと一緒に焼いたチョコチップクッキーを食べたり、レストランのデザートバーへ行ったりと本当にうれしかったです。アメリカでは、ピザやハンバーガー、海岸でのバーベキューなど、どれもおいしく量が多いのでしっかりと太って帰ってきました。

アメリカでの二週間、今になると夢を見ていたみたいです。それまでもっと英語を勉強して、いろんな人と話せるようになりたいと思います。